

令和 8 年度

飛騨市少年の主張大会

～ 発表記録集 ～



主催 飛騨市青少年育成市民会議

共催 飛騨市 飛騨市教育委員会

もくじ

【中学生部門】

弱さも認め合える社会を	古川 三年	井端 結衣	1
灯火をつなぐ	古川 三年	磐佐 柑那	3
何気ない日々からこそ 価値がある	古川 三年	磐佐 心那	5
SNSを使いこなせ！	山之村 二年	沖田 陽向	7
向かい風を追い風に	神岡 三年	田立 心	9
見えない空気	古川 三年	森下 天音	11
「普通」って何？	神岡 三年	山平 煌莉	13



【小学生部門】

友だちとの 関わりについて	古川西 六年	穴田 璃子	15
食のバリアフリーを 実現したい	古川 六年	岩佐 拓磨	17
宮川小での私	宮川 六年	大下 花	19
自分らしさ	古川 六年	川端 泰芯	21
わたしのともだち	神岡 六年	清水 小梅	23
山之村の誇り 「私たちが愛する「きつねつり」」	山之村 六年	清水 心晴	25
元気な生活は、 ひいばあちゃんから学ぶ	古川 六年	中貝 理瑚	27
牛飼いになりたい	河合 六年	水川 直太郎	29



弱さも認め合える社会を

古川中学校 三年 井端 結衣

「自信持つてね。」英語の授業中、先生からもらった言葉です。それは、体育祭の係の活動が上手くいかず、悩んでいた時期のことでした。

私は三年生になり、体育祭の広報部長に立候補しました。人前で話すのが苦手そうな友達が、自分の弱さを強さに変えようと努力し、クラスの中で周りを引っ張っていく姿がかっこよくて、「私も勇気を出して自分を変えたい」と思ったからです。

しかし、いざ活動が始まると現実には甘くありませんでした。他のリーダー達は積極的に呼びかけをしていましたが、私にはできませんでした。

そんな時、言われた「自信持つてね。」という言葉。この言葉を聞き、「あなたならもつとできるよ、もつと上手になれるよ」そう背中を押してもらえた気がして、とても嬉しかったです。先生は英語に関して伝えてくれたただと分かっていましたが、私には私の全てに対して言ってくれているように感じました。

でも、同時に、「自信が持てないこと」これこそが私の「弱さ」だったんだなと突きつけられた気がしました。

思えば、私はずっとこの弱さを抱えてきました。自信がないから自分から仲間に関わりに行くことができず、休み時間に話す友達があまりいないし、何人かで集まって、笑い合っている多くの仲間の姿が羨ましいといつも思っ

てしまいます。誰かと話したいと思ってるけれど、自分から話しかけにくくできません。「周りにはどう思われているんだろう」といつも怖くなくなってしまふからです。話しかけにくくれる仲間もいますが、何を話せばいいのか分からなくなり、気まずい沈黙が続いてしまうこともあります。大勢の前で話す時には、事前に内容を考えていても緊張してうまく話せません。そんな自分が嫌いになり、「この弱さと、どう向き合っていけばいいのだろう」といつも考えていました。

しかし、自分を変えることができず、時間だけが過ぎていく毎日でした。そんな時、迎えた体育祭。広報部長として応援の冊子を作る時、自分がしたいことは分かっているのに、仲間に指示を出すことができません。時間だけが過ぎていくことに、私は焦っていました。

そんな私を支えてくれたのは、周りの仲間たちです。「こうするのはどうか」「これやろうか」仲間たちは、上手くできない私を責めるのではなく、一緒に考え、支えてくれました。その優しさに触れた時、私は弱さを隠そうとしていた自分に気づきました。

私は、みんなに指示を出すことが苦手でしかたないけれど、自分にできることを精一杯やろうと思いました。そこで、体育祭練習の様子や団長たちのアドバイス、仲間たちの頑張る姿を団通信に毎日書き続けました。

すると、先生や仲間から、「こんなに作ったんだね」「毎日よく頑張ったね」と言ってもらえました。こんな私でも認めてもらえて、とても嬉しかったです。「何事にもコツコツ丁寧に組み組めること」が私の強さなのだと知ること

ができました。

私は、弱さを克服したわけではありません。今でも、人前で話すのは苦手です。でも、弱さを抱えながらも向き合い、自分の強さを見つけて行動できたことで、私の心の中に少しずつ「自信」が育っていったのだと思います。その自信を育ててくれたのは周りの仲間です。もし「部長になったんだから呼びかけとかしてよ」などと自分の弱さを否定するようなことを言われていたら、ここまで頑張ることはできなかったと思います。頑張れたのは、周りの仲間が私の弱さを受け入れ、強さを認めてくれたからです。弱さを克服することは大切です。でも、それだけではありません。弱さに向き合いながら、強さを見つけ、それを伸ばしていくことも大切なことなのだと思えます。

強さだけではなく、弱さも認め合えることで、誰もが安心して過ごせる社会に近づいていくのではないのでしょうか。みんなで作っていきませんか。弱さも認め合える社会を。



灯火をつなぐ

古川中学校 三年 磐佐 柑那

独特の緊張感と高揚感の中、起こし太鼓の低く大きい音が町中に鳴り響く。周りでは多くの見物客が歓声を上げている。

いつもの祭りのいつもの光景。でも今年、私は「横打ち」としてやぐらに上がった父から目が離せませんでした。

毎年四月に行われる古川祭りは、街中に響く起こし太鼓で有名な、地域をあげた大祭です。

しかし、実際に担い手として役割を持つ私はこれまで、「古川祭りは最高だ」と自信を持って言えませんでした。練習は夜遅くまであります。コミュニケーションに自信のない私にとって、普段話さない大人との関わりは気を遣うことばかりで、この時期が近づくと「また祭りかあ」とため息が出ていました。でも今年、私の祭りとの向き合い方が変わる大きな出来事がありました。

私には大好きな祖父がいました。幼い頃から一緒に遊んでくれた、優しく温かい自慢の祖父でした。そんな祖父が突然亡くなったのは、今年の一月、冬休みのことでした。突然のことに理解が追いつかず、学校が始まって心にぽっかりと穴が空いたようでした。ふとした瞬間に祖父を思い出し、涙が溢れるばかりの日々が続きました。

そんな中で、古川祭りの時期がやってきました。私は「役割を果たさなけ

れば。」「でもおじいちゃんのこともあるし、今年は参加を見送りたい。」と葛藤しました。ただ「祖父も好きだった祭りをやり切ろう。」と何とか自分を奮い立たせ、練習に参加しました。同時に、今年は今までのように「嫌だな、面倒だな。」と思いながら参加するのだけは違う気がしていました。

そんなある日、私は古川祭りを取り上げた新聞記事の中に、父を見つけました。今年、父は起こし太鼓のやぐらに乗る「横打ち」という大役を務めることになっていました。しかし記事には、父が祖父の死後、ずっと参加を悩んでいた心境が綴られていました。それは「亡くなった父を偲び、今年は参加を控えようと思っていた。」「だが、仲間の温かい後押しもあり、大役を務める決意をした。」という内容でした。私は父と、祖父の死についてじっくり話したことはありませんでした。この記事を読んで初めて、父も私と同じように深く悲しんでいたこと、だからこそ悩んでいたことを知りました。「それでも父は、祖父の好きだった祭りを大成功させたいと思っている。」この時から、私の祭りへの思いが変わりました。これまでになく真剣に祭りの練習に取り組みました。

そして祭り当日、いよいよ起こし太鼓の時間がやってきました。提灯行列の役を務めながら、私は父の記事と、祭りが好きだった祖父と過ごした日々を思い出しました。そして、父がやぐらに乗る瞬間がやってきました。私はいつもより何倍も遅しく見える父から、目が離せませんでした。勇ましく太鼓の音を響かせ、大役を果たす父の姿は、私の悲しみに一つの区切りをつけてくれたような気がしました。「今年の祭りに参加して、本当に良かった。」

心からそう思えました。

「伝統を守ることは大切だ。」とよく言われます。でも、なぜ大切なのでしょう。私は今年、祖父の死と古川祭りを通して伝統をつなぐ人の想いに触れました。毎年行われる祭りに、誰もが思いや願いを持って参加しています。私にとって古川祭りは、祖父を想う気持ち、家族の絆の深さ、命のつながりを実感できる行事です。

伝統とは、これまでもこれからも繋がっていく「命の灯火」です。伝統を守るということは、先人たちが繋いできた命の灯火を絶やさずに、次の世代へ引き継ぐことです。現在古川祭りは、人口減少による人手不足という課題に直面しています。しかしこの祭りは人と人とを強く結びつける力を持っています。だから私は、この自慢の祭りを心から大切にしていきたい。これまで続いてきた家族の、地域の、そして命の灯火を途切れさせることなく、未来へと繋いでいくために。



何気ない日々からこそ価値がある

古川中学校 三年 磐佐 心那

私のおじいちゃんは、出かけることが大好きで、私がまだ小さいころ、おじいちゃんの大きな手を握って、よく遊びに連れて行ってもらった。また、家に遊びに行くと、毎回「おう、いらっしやい。」と、いつも座っている座椅子から、私たちを迎え入れてくれた。親戚みんなが集まって、ご飯を食べるとき、必ずおじいちゃんの座る席は決まっていて、おじいちゃんを中心に家族が回っている感じだった。それが何年も続いていたため、私はこんな食風景が、いつまでも続くものだと思っていた。

しかし、おじいちゃんは二年前、体にガンが見つかり、入退院を何度も繰り返すようになった。前までのように、みんなで集まることも難しくなり、おじいちゃんにもなかなか会えなくなってしまった。数か月が経ち、おじいちゃんは久しぶりに退院してきた。私も家族もうれしくて、すぐおじいちゃんに会いに行った。でもそこには前よりも少し痩せたおじいちゃんの姿があった。私が、「体調大丈夫？」と聞くと、「大丈夫やよ」と答えた。会話をする限り、前とあまり変わっていないおじいちゃんだったので、ひどく心配することもなく、その時間を一緒に過ごした。今から考えると、そのときの私は、ただそう思っていただけで、いつでも会えるという気持ちもあって、頻繁に会いに行っていた訳ではなかったと思う。「今日は宿題があるから」「今日は学校があって疲れているから」などと、些細なことを言い訳にして・・・。

しかし、おじいちゃんの体が良くなることはなく、退院してきても、寝て過ごすことが増えてきた。おじいちゃんに会いに行っても、体を起こすことなく目を瞑っていたり、体を起こしてはいても、テレビの画面に目を向けているだけ、といった様子だった。私が話しかけても、返事を返すのに時間がかかったり、自分で立ち上がったものを取りに行ったりすることもできなくなってしまう。ついに、話しかけると返事をしてくれたおじいちゃんは、呼びかけた人の方に、濁った眼を動かすだけになってしまった。

おじいちゃんがもう長くはないことを知った私は、小さいころ手をつないで遊びに連れて行ってもらった時よりも、強くおじいちゃんの手を握りしめ、「おじいちゃん、おじいちゃん」と呼びかけた。規則正しかった呼吸の音が、徐々に小さくなっていった。そして、ついにおじいちゃんは命を引き取った。

私の心には、おじいちゃんがまだ元気だったとき、もっと一緒におじいちゃんの趣味を楽しんだり、ガンだと診断されたとき、大丈夫だよ、と安心させられるような言葉をかけたりしてあげれば良かったなど、沢山の後悔が残った。あのとき、あのとき……。やるべきことは何だったのだろうか、と。

私は、学級の話し合いで仲間が意見を述べた時、なんて反応をしたらいいのかわからなくて、反応ができない時がある。そうすると相手は安心することができず、不安な気持ちに覆われてしまう。そこで、誰かが反応をしても、しなくても、時間は自然に過ぎていく。

そんな時、一人でも反応してくれる人がいればその仲間はそんな些細なことで不安な気持ちが和らぐと思う。だから私は、クラスの話し合いの場でも

相手のことを思いやる心で、じっくり聞き反応したい。

これから私は、今以上に家族や仲間と過ごす時間を大切にし、何気ない一日が無駄なものにならないように、過ごしていきたい。

自分一人が動かなくても、時間は勝手に進んでいくものだ。だからこそ、私はそんなふうに人生の時間を削っていきたくない。困っている人がいたら、傍観者になって放っておくのではなく、自分から声をかけ、人のために自分が正しいと思う行動ができる人になりたい。そして、これから先、出会う人との貴重な時間を大切にし、後悔の残らない生き方をしたい。



SNSを使いこなせ！

山之村中学校 二年 沖田 陽向

私たちにとって、スマートフォンやSNSは、連絡手段としての役割、自分の趣味や流行を知るための役割として欠かせないものです。しかし、一歩間違えると、生活習慣の乱れ、知らない人と関わることによるトラブル、ネットいじめなどの問題に巻き込まれてしまうこともあります。

最近では、私たち子どもがそのようなトラブルに巻き込まれないようにと、海外では、未成年のデジタル機器の使用を制限する法律が作られた国もあり、日本も少しずつ動き始めていると聞きます。しかし、私は、そのように法律で制限されるよりも、自分たちが危険性を正しく理解することで、自分自分をコントロールし、デジタル機器を正しく使いこなすスキルを身につける必要があると考えます。

特に私が課題だと感じるのは、スマホ依存症です。実際に総務省の調べでは、約九十%の中学生にインターネットが普及しており、約五十%の中学生が一日四時間以上使用しているという調査結果も出ています。さらには、家にいる時間のほとんどをスマートフォンの使用にあてている人もいるようで、依存は深刻な問題と言えます。その原因は、相手とつながりたい、必要とされたいという承認欲求や自分の知らないところで話が進んでいく孤独感を感じているのではないかと私は思います。きっと、常に返信が気になり、スマートフォンを手放さずにはいられないため、使用時間が長くなってしまっ

ではないでしょうか。そして、それが集中力や記憶力、視力の低下、睡眠不足による体調不良を引き起こしてしまうことにつながるのです。加えて、その悪循環から抜け出すことができず、生活リズムがだんだん乱れていてしまします。

だからこそ、私たちはスマートフォンに「振り回される側」から「使いこなす側」へと変わらなければなりません。きっと、大人になっていくにつれて、よりデジタル機器を使う機会が増えるでしょう。だからこそ、私たちは今、スマートフォンとの正しい付き合い方を身につけるべきなのだと考えます。

では、具体的にどうすればよいのでしょうか。まずは、自分を見失わず、自分のスマートフォンとの向き合い方を友達に理解してもらうことです。

私は、友達個人から連絡が来た場合は、私に用事があって連絡してくれているのでテンポよく返すことを心がけています。しかし、グループメッセージ内では、自分が話したい時にトークに入るようにしています。もちろん自分が入っていない間に、どんな話をしているのかは気になりますが、自分のやりたいことを優先して、スマートフォンの通知に惑わされないようにしています。私のこの使い方を友達も理解してくれているので、お互いに気持ちよく関わることができていると思います。

二つ目は、友達や家族とルールを作ることです。ここで注意すべきなのは、自分だけでルールを作らないことです。自分だけで決めたルールだと、まあいいやと破ってしまう危険性があります。だからこそ、誰かと作ることをお

勧めします。例えば、「二十一時以降は、スマートフォンを充電器に差し、勉強中は通知をオフにして机の上に置く」など自分の生活リズムを崩さないためのルールを作るのはいかがでしょうか。

三つ目は、デジタルデトックスをすることです。やり方はたくさんありますが、特に私がお勧めしたいのは、寝る一時間前からスマートフォンを使わないという方法です。寝る前に、脳を落ち着いた状態へともっていくことで、睡眠と勉強の質が上がります。そうすることで、自然とスマートフォンから離れることができます。

スマートフォンやタブレット端末などのデジタル機器は、私たちがどのように使うかによって、生活をより豊かにする「アイテム」にもなれば、自分の生活や心を破壊する「凶器」にもなります。まずは、私が正しい使い方と誘惑に負けない強い心をもって、この便利なツールを主体的に使いこなし、自分の生活をより豊かにしていきます。



向かい風を追い風に

神岡中学校 三年 田立 心

風が吹いている。風が吹いている。苦しい。いまずぐ足を止めてしまいたい…。私は本当に運動、特に持久走が大嫌いです。走っていると、周りからの視線をより感じる気がします。肺が痛くて向かい風にも痛さを感じます。足が遅い自分を見られるのが恥ずかしいのです。そんな状況で仲間がかけしてくれる応援は、私の中で強要の言葉に感じました。「頑張り」は「やりきれ」。足を止めるなという脅迫。みんな善意で応援してくれているのはわかっていたけど、自分が見られているというのをより感じて、「今すぐ走るのをやめたい」としか思えなかったです。

私は劣等感が嫌で授業をよく休みました。最初からやらなければ自分の「出来ない」を見なくて済むからです。避け続けるのは簡単なことです。でも他の人がやっている間、自分だけ適当な理由をつけて休んでいることへの後ろめたさ。それに、授業を受けなければ評価はつかないという現実もあります。また、高校に入ってから出席しなければいけない回数が決まっていることを、進路選択の中で知りました。だから私はこの逃げている自分の状況に不安を感じました。逃げ続けるか、数年後の自分のために苦しいことを押し殺してやるべきか…。

逃げずに授業に出席するためにどうしたらいいか。私は教科担当の先生に嫌だということを伝えることを選びました。自分の思いを伝えることでやっ

と「自分と向き合える」と少し思えたからです。でもすぐにそう思い至ったわけでもなく、自分の気持ちを伝えた時に「否定されるかも」という不安がありました。やりたくない人もいる、けれど「みんな頑張っているから…」「どうしよう…」ということがずっと頭にあっただし、先生に私の気持ちを打ち明けた後先生に甘えて授業にずっと参加しないというのも一度考えました。色々迷って即決できず、母にも相談してみました。母は私の「自分を変えたい」を肯定してくれて少し勇気をもらえました。色々な考えや感情が頭にあったけど、勇気を出して教科担当の先生に相談することができました。私の不安とは裏腹に、先生は私の話を聞いてくれて一緒に私に合う持久走のやり方を考えてくれました。皆と同じ距離だけど、歩いて参加するのはどうだろう…先生からの提案でそんなやり方で逃げずに向かおう、と決まったのです。「相談できてよかった」という気持ちでいっぱいでした。その次の授業ではいつもより足取りが軽い気がして、みんなとは違ってゆっくりゆっくり自分のペースでしたが、安心して授業を終えました。

私は諦めたことが何度もあります。正直、高校での自分、未来への不安が一番大きかったので、それがなかったら今も授業を避けていたと思います。苦手との向き合い方は人それぞれです。「逃げ」は卑怯なことではなく自分を守るための一つ的手段。ただやはり、逃げ続けるというのは後ろめたく、それはそれで苦しいということを、私は知りました。だから「克服したい」という気持ちは自分の不安や苦しみを減らすための立派な一歩だと思っています。

ただ、どうしてそうするのかという自分の気持ちを周りの人や、友達にハッキリさせ伝えてみるのが何よりも大切だと思います。

私は今年、逃げる自分と向き合い、少しでも挑戦できる自分でいたいです。私は自分から進んで動けるタイプではありません。でも内心こうしたいという自分の意思はあり、でもそれを抑えることが多いです。「間違ったことを言っていたら…」という心配もあります。そんな中、自分の嫌い・苦手をこの場で発表する、という挑戦ができて良かったです。

風が吹いている…今、三年生の夏を迎えようとする私に、風が吹いています。苦手から逃げる自分から、苦手と向き合う自分へ向かっていく中、風は私の背を押し、応援してくれるかのようです。



見えない空気

古川中学校 三年 森下 天音

「私はこうだと思う。」

たったそれだけの言葉なのに、私は言うことができませんでした。

先日行われた前期生徒総会の質疑応答で、私は質問したことがありました。しかし、誰も手を举げない空気の中で、私だけが手を挙げる、という勇気がでませんでした。すると、一人の生徒が勇気を出して手を挙げました。その人が話したことは「感想」でした。そのあとからは、体育館には「感想を言う流れ」が出来上がっており、私もその空気に合わせなければいけないような気持ちになってしまいました。その後も、続いて言ってくれたのは感想でした。何度も「質問しなければ」という思いが湧き出てきましたが、「みんな感想を言ってるのに一人だけ質問だ」「変な人だな」と思われるのではないかと、という考えがそれを打ち消し、結局私が質問をすることはありませんでした。「これでいいのか」という自己嫌悪感が残りました。

私はこのように、空気を読んで意見を合わせてしまう場面が日常にもあります。例えば、いつものように友達と話しているとき、「これ天音も賛成だよね」「私は反対だけれど、みんな賛成だし、言うのは怖いから、私も賛成にしよう」「私も賛成！」このような、周りの意見や雰囲気にならされてしまう、という経験は誰しもあるのではないのでしょうか。多くの人が、人との軋轢をさけるために、自分の本当の考えを抑えている、と私は感じます。私

はこの、周りの空気によって、自分の行動や意見が左右されてしまうことが、「同調圧力」というものと気づきました。同調圧力とは、集団の中で、少数派が多数派の意見や行動に合わせるよう、暗黙のプレッシャーを掛けられる心理的・社会的な現象のことを言います。私は、同調圧力が生まれてしまう理由は、「嫌われたくない」という思いだけでなく、周りと違うことを言ったり行動したりして、浮いてしまうことが怖い、と感じてしまうからだと思います。特に、学校生活では、毎日同じ人と関わるからこそ雰囲気や人間関係を壊したくないと感じ、自分の本音を隠してしまう人が多いのだと思います。

私はバスケットボールクラブに所属しているのですが、先月の練習のことです。いつも外部コーチとしてきてくれている先生が用事で来られなくなりました。そのとき、キャプテンである私が練習をしることになりました。最初はみんな集中力があり、真剣に行うことができていて、私は安心していました。しかし、だんだん時間が経つにつれて、集中力や体力が切れ、適当に練習をする人が出てきました。一人の笑い声が伝染し、体育館には、「真面目に練習する」という雰囲気ではなく、「ふざける」や「適当にやる」という雰囲気ではいっばいになっていました。でも一人だけ真面目にやるとみんなから浮いてしまうし、いい子ぶってると思われてしまうと思い、みんなに合わせてしまいました。その時の雰囲気はやはり同調圧力によって生まれたのだと思います。今から思うと、きっかけは些細なことだったと思いますが、私もみんなと同じようにふざけてしまっていたのです。「最後までちゃんと

練習すればよかった」と後悔をするくらいなら、私はこれから少しの勇気を出していきたいと思いました。

みんながみんな同じ意見で、同じ気持ちのはずはありません。嘘の同意ではなく、違う意見でも認め合える雰囲気や、理想の仲間関係なのだと考えます。無意識のうちに相手に同意を強制していないか、今一度自分の行動を見直す必要があります。誰か一人の、勇気ある「違い」を否定するのではなく、認め合える仲間関係を醸成していけば、もともと一人ひとりが自分らしく輝いてすごせるはずです。これから私は、勇気をもつて、こう言いたいと思います。

「私はこう思う！」



「普通」って何？

神岡中学校 三年 山平 煌莉

私の教室の後ろには、こんな言葉が飾られています。「仲間の背景を想像し、共に歩む」これは担任の先生が書いた言葉です。今、私の胸の中には、この「背景を知る」という言葉が大切に留められています。

私は、小学五年生の頃、日々のストレスが原因で小学校に行けなくなりました。最初の頃は部屋にこもってばかり。「なんで自分だけ行けなくなったんだろう」という焦りや、「この先どうしていけばいいかわからない」という不安が大きかったです。

親や学校の先生にたくさん心配をかけました。でも、それが嫌で、無理やり自分の部屋で勉強したり家の手伝いをしたりしました。でもクラスメイトみんながやっている勉強の量とは大幅に違い、色々な人が心配をしてくれたけれど、自分だけでは勉強になりませんでした。

学校に行かなかったから、友達と話す機会も減りました。久々に学校に顔を出して会って話しても、なんだか気まずい…。「嫌いになられたらどうしよう」と心がずーんと重く感じました。

ある日、親と喧嘩して「普通に学校に行きなさい」と言われました。私はその意味が理解できませんでした。「普通ってなに？」と思いました。色々考えてもその答えにたどり着けないままでした。

現在、私は中学三年生。学校の先生や親が寄り添ってくれ、友達の温かい

言葉もあり、たくさんの人のおかげで学校に通えるようになっていきます。しかし、学校に行けるようになって、普通とは何か分かりません。友達に聞いてみると、ある友達は「普通とは、日常生活で生きるために必要なこと、みんながやっていることだ」と教えてくれました。私の両親が「普通に行きなさい」と私に言ったのは、「日本ではみんな、学校に行くことが必要だから」と言う意味だったのかもしれない、と感じました。さらに別の友達は、「一人一人が違う人生を歩んでいるから普通なんてない」と教えてくれました。

みんな違う道を歩んでいるから全員が共通の普通なんてない、それぞれに必要なことも違う、私たちはそれぞれ違う「普通」を持っている…。これが、教室に飾ってある私の担任の先生のいう「背景」なんだと思います。そして、この背景が、それぞれの「普通」を作り出しているのです。私の普通と周りにいる人の普通は違うかもしれませんが、それぞれが抱えている背景や全部知るのは無理かもしれませんが、「これが普通」と自分の背景から来る考えを押し付けるのではなく、それぞれの背景を知ることによって自分の普通がその人の普通でないことを知ったり、尊重して思いやりたりすることができないのではないのでしょうか。

私のクラスには、それぞれ違う道を歩んできた仲間がいます。その中に、朝、起きたくても起きられない友達がいます。私にとっては、朝起きるのが当たり前です。だから最初は、「なんで授業の途中から来る人が多いのかな？」と疑問に思っていました。

しかし、彼女にとっては努力しても難しいということをお知りしました。知ったことで、「なんで？」が「大丈夫かな。」に変わり、分からないことを聞いたり、授業を真剣に受けたりする姿が目に入って「すごい」と思うようになりました。

「普通とは何か」、それを考えるうちに、私は、「背景に寄り添って尊重すること」を学びました。これから、高校生になっても、大人になっても、人と関わる中で私の「普通」を、価値観を押し付けたり、人から聞いたことなどでその人のことを理解したと思ったりしないようにしたいです。たくさん話して背景を知って、尊重できると思います。

今日も私のクラスでは誰かが休んだときには周りの人が代わりに動いて、学級全員がお互いの背景を思いやりながら支え合っています。私はそんなクラスが大好きです。今日もクラスではいろんな声が飛び交います。

「今日発表？頑張ってるね。」

「ナイス、どんまい」

「みんな、仲間の話ちゃんと聞こう！」



友だちとの関わり方

古川西小学校 六年 穴田 璃子

「一緒に遊ぼう。」教室で一人のとき、友だちが声をかけてくれた。その一言で私は、「よかった。一人じゃないんだ。」と安心した。

今年の春、クラス替えがありました。始業式の朝、私は、ドキドキして教室に向かいました。新しいクラスに仲がいい子が全然いないわけじゃなかったけど、話す人がいないような感じがして、何だか一人ぼっちの気分でした。「どうしよう。このまま一人なのかな。」と不安な日が何日か続いていたとき、

「一緒に遊ぼう。」

と話しかけてくれた友だちがいました。

「うん。」

嬉しくてすぐにそう答えました。これまで不安だった気持ちが一気に吹き飛びました。うれしい気持ちになったから、自分からも声をかけてみようと思いが出ました。

私は、友だちとの関わり方で大切なことは、やさしさと思いやりだと思います。友だちとは、いつも一緒にいる大切な人だからこそ相手の気持ちを考えることが大事だと思います。

今、私はバスケットボールを習っています。バスケットボールも仲間との関わり方はとても大切です。みんなで同じ目標に向かってがんばるには、一

人一人が仲間を思いやる事が大切です。私は、大きな声を出して仲間を応援したり、上手いかず落ち込んでいる人がいたら、声をかけたり背中をたいてはげましたりしています。ある試合で、負けていたとき、チームの雰囲気少ししずんでいったことがあります。そんな時には、いつも以上に声を出します。すると、その声に答えるように周りの友達も声を出してくれます。お互いがお互いのことを思つて、声を出し合うと、応援席からの声も大きくなり、チーム全体が元気になります。仲間の気持ちを想像して、苦しいときにこそ、声をかけてもらったら嬉しい、そんな思いやりの気持ちがあるから、お互いに声をかけ合えるのだと思います。

ただ、友だちの中には、自分にとって嫌なことをしたり、言ったりしてくる人もいます。何か嫌なことがあつて、イライラしていたり、つい言いすぎてしまつたりすることは、誰にでもあることです。自分の思いを優先してしまい、嫌なことを言つたり、失礼な態度をとつたり…。私にも経験があります。

でも、だからと言って、その人を嫌な人と決めつけてしまうのは違うと思います。何かあつたんだな、どうしたのかなと相手の気持ちを考えることが大切だと思います。

友だちにやさしくしたり、友達と一緒に楽しく過ごしたりすると、自分もやさしい気持ちになり、楽しくなれます。それは、お互いのことを思い合っているからです。私は、友だちに声をかけてもらつて安心できたことで、友だちとの関わりで大切な優しさと思ひやりに気が付きました。あの時、とて

も嬉しかったから、だから、その気持ちを忘れず、これからは自分からも声をかけたり、友だちに関わつたりすることを大切にしていきたいと思います。



食のバリアフリーを実現したい

古川小学校 六年 岩佐 拓磨

「卵焼きってどんな味なんだろうか。おいしそうだな。」僕のこんな思いを聞いて「えっ」と不思議に感じる人もいるのではないだろうか。卵焼きは朝食の定番です。しかし僕は、卵焼きを食べたことはありません。なぜなら、僕には食物アレルギーがあるからです。

食物アレルギーとは、特定の食べ物に含まれるタンパク質などのアレルギーを体が異物とみなし、免疫が過剰に反応する事です。それによって、腹痛や蕁麻疹、呼吸困難になってしまうこともあります。

僕は卵以外にも七品目にアレルギーがあります。具体的には「卵」「大豆」「小麦」「牛乳」「ごま」「ピーナッツ」「蕎麦」です。小麦と大豆は成長とともに大体食べられるようになりましたが、牛乳は一日に二百ミリリットルまでしか飲めません。ごまは形状によつて違い、ごま油や炒りごまは大丈夫ですが、すりごまや練りごまはごく少量でも食べられません。ピーナッツや蕎麦は命に関わる症状が出る可能性があるので一度も食べた事ありません。そのせいで、みんなが普段食べているようなお菓子や、スーパ-のお惣菜などもいちいち原材料を確認しなくてはならないので、辛く感じることも多いです。

お菓子では卵がアレルギーだと洋菓子がほとんど食べられず、誕生日のケーキも毎年ほとんど同じアレルギー対応のケーキしか食べられません。お惣

菜は食べられるか確認する時に、原材料が容器の下側に書いてある事が多いです。そのため、持ち上げて下から覗き込んで見なくてははいけません。そんな時、悪い事をしているわけではないのに、周りの人から少し変な目で見られているのではないかと不安になります。また、飲食店ではアレルギーの表示がされていない事もよくあります。そういう時は、お店の人に聞かないといけません。過去に僕は原材料が書かれていないものを食べて、呼吸困難や蕁麻疹を起こした事が何度かあります。

また、最近では修学旅行に行く時に、食事に何が使われるかを旅行業者に詳しく調べてもらいました。食材だけでなく調味料の原材料まで細かくです。それを家の人にも確認してもらうという作業を何回もして、とても面倒くさい事だと感じました。アレルギーのない人は「少しくらいいいんじゃないか」と思いかもしれません。でも、僕のような人にとっては、命に関わる重要なことなのです。

そして、僕のように食物アレルギーの人が年々増えていると聞きます。アレルギー症状は、蕁麻疹が出たり、呼吸困難になるだけでなく、命に関わる事もあります。だから僕はこれから、全ての原材料を表示することや、食品の原材料を見やすい場所に表示すること、飲食店ではアレルギー表示をするホームページを作ることなど、とても大切になってくると思います。その為には、食物アレルギーの事を正しく知る人が増える事が大切です。僕は自分の体験した事や工夫している事などを知らない人に伝えていきたいです。そして、学校の授業にも取り入れたりして、アレルギーの事を知る人が増えて

いくと良いと思います。

先日、学校で調理実習があった時に、学校から食材の確認がありました。その中に僕が食べられないハムがありました。でも、僕のお母さんは、僕が食べるのできる種類のハムを学校の先生に紹介してくれました。そのおかげで、僕はみんなと同じようにハム入りの料理を食べる事ができました。いろいろな人のおかげで僕はみんなと同じものを食べる事ができてくすぐく嬉しかったです。

このように、誰もが当たり前に食物アレルギーの知識を持って、食物アレルギーの人に対して「何かできないかな？」と、自分から考える人が増えることを願っています。そうする事で、初めて誰もが安心して暮らせる世の中をみんなで作り広めていく事になると思います。

今、色々な分野でバリアフリー化が進んでいます。食のバリアフリーも広まってみんなが笑顔で安心安全に食べられる世の中になって欲しいです。そして誰もが自分らしく生活が送れる世の中になって欲しいです。それが僕の願いです。



宮川小でのわたし

宮川小学校 六年 大下 花

私は、去年の九月に古川西小学校から宮川小学校に転校してきました。両親から転校の話を聞いたときには、友達と離れるのが嫌で

「転校はしたくない。」

と言いました。正直、しぶしぶ転校することにしました。

はじめて宮川小学校に来た時には、人数が少なくてびっくりしました。宮川小学校は、全校八人の学校で、私と同じ五年生はいませんでした。だから、わたしが転校して九人になり、六年生の貴生さんと同じクラスになりました。古川西小学校とは、いろいろなことが違っていて、教えてもらうことばかりでした。でも、宮川小学校は人数が少ない分、他の学年の子とも仲良く活動したり、一緒に遊んだりしています。一人ひとりとの関係が深いです。休みの日には、みんなで集まって遊ぶ日もあります。今は転校して良かったと思っています。

行事や総合の時間は、全校で取り組むことがほとんどです。去年の秋には、早速運動会に参加しました。転校して一週間後だったので、ダンスなどを必死で覚えました。本番では、ほとんどの種目に出ることができました。

今年度、わたしは最高学年です。全校のリーダーとなって取り組んでいかなければなりません。今年の五月には、総合的な学習の時間で、池ヶ原湿原でのガイド活動をしました。池ヶ原湿原とは、宮川町にあるミズバショウが

綺麗に咲く湿原です。宮川町の宝である、池ヶ原湿原をもっと多くの人に知ってもらいたいと思ってガイドをすることに決めました。はじめは、文章を読むことに精一杯になり、声が小さくなってしまいました。声の大きさを意識して、何度も何度も練習しました。下級生には、「もっと練習しよう。」「もう少し大きい声で話そう。」と声をかけました。

本番当日は天気が悪く、どれだけの人か池ヶ原湿原に来てくれるか不安でした。でも、観光客や児童の親がたくさん聞きに来てくれました。それを見たら、がんばるぞという気持ちがありました。聞いてくれた方が「そうなんだ。」と、分かってくれたのがうれしかったです。

行事や生活の他にも、勉強をがんばっています。宿題は、自分で計画を立てたり、最後までやり切ったりするようにしています。できなかった分も、できる日にやり切るようにしています。そのおかげで今では、問題を解く時間が速くなり、書ける漢字が増えました。できることが増えて来てうれしいです。正直、勉強は嫌いだし、やりたくありません。でも、学んでいくことは必要だと分かったし、続けてやると効果があることも分かりました。だから、これからも計画を立てながら勉強をやりきるようにしたいです。そして、中学校でも続けていきたいです。

今年私は、五年生との複式授業をしています。複式授業とは、一つの教室で二つの学年が一緒に勉強することです。特に算数の授業では、同じ教室でそれぞれの学年が違う内容を学んでいます。先生が五年生の方に行っているときは、一人で問題を解いたり、先生との交流をするために自分の考えをま

とめたりしています。最初は、この授業の仕方が不安でいっぱいでした。五年生の時は私一人に対して、先生が一人ついてくださっていたので、分からないことがあればすぐに聞くことができました。ところが、今年は、一人で学ぶ時間が多くなったので、はじめは困ることもありました。でも、最近慣れてきて、自分で学びを進める力が付きました。

古川中学校に進学すると、クラスの人数が増えます。宮川小学校で付けた、自分で学習を進めることに加えて、たくさん仲間と協力することで、中学校でも頑張りたいです。



自分らしさ

古川小学校 六年 川端 泰苾

「ナイスシュート！」

仲間の大きな声が響き、みんなが僕の方へと駆けてきます。本当は「やったあ」と叫びたい。でも、僕は少し恥ずかしくて、大きなリアクションをうまく表に出すことができません。そんな僕の肩を叩いたり、ハイタッチをしたりして、仲間の誰もが自分のことのように喜んでくれる。これが、内気な僕がサッカーを続けてこられた要因、そして、一番幸せだと感じる瞬間です。

僕は昔から、自分から積極的に仲間に関わるタイプではありません。チームの中でもおとなしい方で、みんなを大声で引く張るキャプテンのようなタイプには、どうしてもなれません。試合中にゴールを決めた時、プロの選手や他の仲間のように、大きく両手を広げてガッツポーズをしたり、大きな声を上げたりするのも、どこか恥ずかしいと思っています。心の中では、飛び上がるほど嬉しいのに、本当は、みんなと一緒に「やった！」と喜びたい。けれど、それをどう表現していいか分からず、いつも静かに自分のポジションへ戻っています。

けれど、そんな僕を少しずつ変えているのが、大好きなサッカーなのです。サッカーを始めて、特に大変だったのは、毎日の走り込みです。足が重くなって、「もう無理だ」と立ち止まりそうになったこともあります。

しかし、そんな時に横を見ると、同じように一生懸命走る仲間の姿があり

ました。それを見て、「みんなと一緒にがんばりたい」と思い必死に走り続けてきました。

こうした毎日の練習のおかげで、気づけば僕の走りは力強くなり、見違えるほど足が速くなっていました。

そして、秋の運動会。リレーでは、前のランナーとの距離をぐんぐん縮め、クラスのために一生懸命走ることができました。あきらめずに走ってよかったと、心から思いました。

それだけでなく、ボールの動きに素早く反応する反射神経も、毎日の練習の中で自然と身についていきました。ゴール前で混戦になった時、こぼれてきたボールに対して、体が勝手に動き、ボールに反応している自分。そのことが、どんどん自分への自信になっていきました。

僕にとって、サッカーをやっている一番嬉しいと感じる場面。それはやっぱり、僕がゴールを決めて、みんなが駆け寄ってハイタッチしてくれる瞬間です。

ある試合のとき、僕はパスを受けて、相手にマークされながらもそれかわし、シュートを決めました。ゴールを決められるか、とても緊張していたことを今でも覚えています。ボールがネットに吸い込まれた瞬間、僕はいつものように、派手なポーズもせず、冷静にその場に立ち尽くしていました。心の中は熱い気持ちでいっぱいであふれていたのですが、やはり、静かな僕なのです。しかし、すると、ベンチからも、フィールドからも、仲間たちが笑顔で僕に向かって駆け寄り、囲んでくれました。

「よく決めたな！」

「ナイスシュート！」

みんなが僕の手を叩き、背中を押してくれました。僕は自分からうまく喜びを表現できないけれど、みんなが笑顔で寄ってきてくれ、心の中がじわっと温かくなり、言葉をたくさん交わさなくても、「みんなの仲間なんだ」と感じ体が熱くなりました。

チームには、声を張り上げてみんなを引っ張る人も必要です。けれど、僕のように静かに自分の役割を果たし、プレーでがんばる人間がいてもいい。その時、僕はそう思うことができました。

僕という個性を大切にし、チームの一員として認め、信じてパスを出し続けてくれる仲間がいたからこそ、僕はここまでサッカーを続けてこられたのだと思います。おとなしい性格は、決して弱いということではなく、目の前のプレーに深く集中するための「僕らしさ」なのだと思えるようになりました。

中学校へ行っても、この大好きなサッカーを仲間たちとずっと続けていきたいと思っています。

これからも僕は、自分らしく、静かに。けれど、誰にも負けないくらい熱い気持ちをもって、グラウンドを駆け抜きたいです。自分を支えてくれる仲間を大切に、これからも一緒に一つのボールを追いかけていきたいと思っています。

「自分らしく」



私のともだち

神岡小学校 六年 清水 小梅

いきなりですが、私今すごく忙しいです。大変です。なぜ忙しいかと言うと、習いごとがたくさんあり、どれも一生懸命取り組んでうまくなりたいと思っているからです。だからと言って習いごとのどれかを辞めることは考えていません。ただ一つ嫌だなと思うことがあります。それは、みんなと一緒に遊べないことです。

「今日一緒に遊ぼう。」と誘ってくれるのはすごく嬉しいことです。しかし、時間がない時だと、断らなくてはならなくて、相手が嫌な気持ちになるかもしれないと思うと、断る時に嫌な気持ちになることもあります。

でも、私の「ともだち」は違います。そんなにたくさんではないけれど、誘ってくれるタイミングが合うのです。また、遊べなくてもいいと思えます。これは良い意味で遊べなくても平気なのです。逆にたまにしか遊べないのが良いのかもしれません。

なぜだろうかと考えました。普段遊べないから遊べる時は特別感があって良いのかとも思います。でもそれだったら他のみんなも同じだと思います。でもそうではありません。

「なぜだろう。」最近遊んだことを思い出してみる。二人で遊んだことは、キャッチボールとバレー、そして少しかゲームをした。特別なことは何もなく、誰とでもやりそうな遊びをしただけで、何か特別楽しいことはしてい

ません。では、なぜだろうかこの「ともだち」と一緒にいたいと思うのは・・・

それはきつと「私と『ともだち』は合っている」からだと思います。サバサバしている性格で、お互いに気を遣わなくても良い関係性があるからだと思います。面倒なことがなくて、私自身が楽でいられるからだだと思います。それだけじゃない何かが私と「ともだち」にはあるような気がします。そう考えると学校生活の中であつたある場面が浮かんできました。それは何気ない休み時間とその後の授業のことです。

私と友達はいつものにダンスを踊っていました。パツと振り付けを考えて、わいわい楽しく私たちのダンスを踊っていました。とても楽しかったです。でも、授業になった時ともだちは休み時間の時とは違って真剣な眼差しで話を聞いていました。周りが騒がしくなると注意もしていました。この時感じました。「格好良い。」憧れとも言える友達への思いが、強くなっていることに気づきました。

私も「ともだち」のように休み時間と授業でスイッチを切り替えられるようになりたいと思っているし、学級の人々にもそうなって欲しいと願っています。そのことが「ともだち」と一致したことがとても嬉しかったことを思い出したのです。

一緒にいると楽しくて、嘘のない自分でいられること。そして同じ目標やこうなりたいと願うことが一致していることがこのともだちと一緒にいたいと思う理由なのだと思います。

優しくて、明るくて、とても親しみやすいともだち。だから私も自然に似

てきていると思います。また、お互いが習いごとに一生懸命に打ち込んでいることが分かるから、無理に遊びに誘わないのだと思います。一緒にいない時でもお互いにつながっていると思えるし、きつと頑張っているんだと応援し合っていると思えます。そんな関係を私は作れているのではないかと思います。だから彼女を親友とも言えます。この親友が頑張っているから私も頑張れるのです。

私今すごく忙しいんです。でも、「ともだち」も忙しいんです。だから遊べなくても良いです。お互いが一生懸命に頑張っていると思うとなぜか安心して、私は頑張れます。そして遊ぶときは全力で楽しめるのです。



山之村の誇り　　〜私たちが愛する「きつねつり」〜

山之村小学校　六年　清水　心晴

私が住んでいる神岡町森茂地区には、きつねつりという伝統文化があります。私は、このきつねつりの魅力を再確認し、発信することで、これから先も継承していきたいと考えています。

皆さんは、このきつねつりを知っていますか。きつねつりとは、白山神社の例祭で行われている獅子舞の後に登場する演目のことです。金蔵が笛や太鼓の音に合わせて、さお先から垂らした油揚げや、ねずみ、さるぼぼを操り、きつねに芸をさせます。油揚げが食べたいきつねは、金蔵に認めてもらおうと様々な技を披露します。

このきつねつりの魅力は、笛の音に合わせて、きつねが二人前転や側転、馬跳びなどを披露するところです。特に、きつねが油揚げをおねだりするポーズがとても可愛らしくて、私は好きです。ノリノリの太鼓と笛の音、それに合わせて金蔵ときつねが舞う姿は最高です。そもそも、このきつねつりの始まりは、鎌倉時代からだとか、江戸時代からだとか、いくつかのいわれがありますが、少なくとも百五十年以上昔から受け継がれてきていることは間違いないです。それくらい昔に始まったきつねつりを今の私たちが演じることができていることをとても誇りに思います。

私たち山之村小中学校の児童生徒は、このきつねつりを森茂地区の祭りだけではなく、毎年、文化祭でも披露します。私自身、小学一年生から四年生

までは、きつねに挑戦しました。前転や後転、側転などは、体育の授業で習うので、あまり難しさを感じることはありませんが、二人前転は難易度の高い技で、何回も練習が必要でした。そんな時には、心強い地域の人の力を借ります。地域の人が学校に来て、難しい技を教えてくださいださったり、より良くなるようにアドバイスをしてくださったりします。地域の人は優しく、分かりやすく教えてくれるので、苦手な技も少しずつできるようになりました。

昨年度は、初めて笛にも挑戦しました。横笛は、息の出し方にコツがいるし、指の動きも複雑で、なかなかきれいな音色が出ません。だから、今年の文化祭では、家でもたくさん練習して、一人で最後まで吹ききるくらいのスキルを身につけたいです。そして、文化祭では、私たちだけでなく、卒業生や先生方も一緒に笛を吹きます。みんなで一つのきつねつりをつくり上げていく、その感覚がとても心地よくて、その瞬間が大好きです。

そんなきつねつりですが、山之村の人口減少や高齢化が進んでおり、きつねつりを残していくためには、私たちが受け継いでいく必要があります。しかし、今の山之村小中学校の児童生徒数は十名で、小学校四年生以下はいません。卒業して人数が減っていく度に伝統を受け継ぐ人がいなくなり、文化も消えていってしまうのではと不安を感じています。

それでも私は、きつねつりを絶対に失くしたくありません。なぜなら、私が山之村を、地域の文化を愛しているからです。

そこで、この文化をずっと伝承していくために、私にできることを考えてみました。

一つ目は、心を込めて演じることです。きつねつりの動きには、一つ一つに意味があります。おねだりをする振り付けにも、衣装にも。ただ振り付けを真似するのではなく、動きの意味を考えながら、演じていくことが大切です。それが文化を大切にすることにつながっていくと思います。

二つ目は、私自身がきつねつりマスターになり、多くの人にかつねつりの魅力を広めていくことです。きつねつりの始まりや時代背景など、きつねつりの歴史や意味を地域の人や山之村に来た人たちに広めていきます。

私たちが愛する、きつねつり。次の世代を担う私たちが、この魅力を再確認し、発信していくことができれば、伝統を継承していくことができます。

私は、山之村という地域、そして地域の人と私たちをつないでくれる、このきつねつりをいつまでも大切にしていきます。



元気な生活は、ひいばあちゃんから学ぶ

古川小学校 六年 中貝 理瑚

私のひいばあちゃんは、とても健康で長生きしています。今年九十三歳になるひいばあちゃんは、介護もなく一人で歩いているし、入れ歯もしていません。毎日元気に過ごしています。でも、今の時代、私たちの中には不健康な暮らしを送っている人も少なくないのではないのでしょうか。

私は毎日を送っていると、インターネットを使いすぎてしまったりして、読書や、折り紙をおるなどの遊びをすることが少ないと思います。でも、そんな時ひいばあちゃんの家に行くと、ひいばあちゃんは、虫眼鏡をのぞきながら新聞を読んでいたりと、テレビを見ていたり、一生懸命数独をしたりしていて、とても元気です。

今年九十三歳になるのですが、とても健康で一緒にご飯を食べに行ったり、買い物に行ったりもします。畑を持っていて、昔から畑仕事をしていました。また、前は田んぼも持っていて、稲作もしていたそうです。以前、私がひいばあちゃんと一緒に畑に行くと、畑仕事のお手伝いをしたときには、畑を耕したり、作物の種をまいたりしました。その仕事はとても大変で、私はすぐに疲れてしまいましたが、ひいばあちゃんは、どんどん畑を耕していくので、私は「すごいな、元気だな。」と思いました。こういった体を動かす機会がなければ、健康にも影響していると言えると思います。皆さんは、休日などに外に出て、元気に体を動かす機会が減ってきているのではないのでしょうか。

逆に、私のひいばあちゃんのように元気に体を動かしている場合は、健康につながっていくと思います。

また、私のひいばあちゃんは、毎日お経をあげています。一日一回、毎日欠かすことなく、仏様やご先祖様にお経をあげているのです。私も、何度か一緒に、お経をあげたことがあるので、そのときにお経の最初の部分を少し覚えたのですが、聞いたこともない言葉ばかりで、覚えるのがとても難しかったです。それに、今、私はその半分くらいしか覚えていません。それなのに、私のひいばあちゃんは、何も見ずに長いお経をすらすらとあげていきました。だから私は、このお経はひいばあちゃんの記憶力や、頭の体操にもつながっているのではないかなと思いました。このお経のように、毎日何かを続ける習慣も健康には大切だと考えます。他にも新聞を読んだり、本を読んだり、数独をしたり、テレビを見たり、いろんなことをして毎日を過ごしています。新聞や読書で活字に触れたり、数独やクロスワードで頭を動かしたり、適度にテレビなどを見たり、その生活の毎日が楽しいこともひいばあちゃんの元気につながっていると思います。私はそんな、元気なひいばあちゃんに、これからもずっと元気でいてほしいし、健康でいてほしいと思いました。同時に自分も、ひいばあちゃんのようにずっと元気でいたいと思います。

最後に、今は電子機器などの便利なものや、楽しいものがたくさんあって、暮らしもすごく豊かになりました。でも、豊かになりすぎて、体を動かしたり、電子機器以外のものでも楽しんだり、活字に触れたりすることが減って、

不健康な暮らしを送っている人も少なくないと思います。私も自分の生活があまり良くないなと感じることがあります。もちろんスマホなどはすごく便利だし、今の生活にはなくてはならないものです。でも、使い方を工夫することで、健康にも繋がります。だからこそ私たちは、昔の人の豊かな暮らしや、私のひいばあちゃんのような暮らしについて知り、さらに今の暮らしと照らし合わせながら、健康で元気な生活を送っていくべきだと考えます。例えば飛騨市で、市民の皆さんが参加したくなるような体を動かす機会を提案したり、メディアを使わないで楽しんだりできる娯楽の紹介ができると良いと思います。または、飛騨市の古い遊びや文化、歴史などを活用した遊びを考え、それらを行うと良いと考えます。飛騨市民の皆さんの生活に、これらの内容が定着し、継続的に健康で楽しい、そして、高齢化が進むこの地だからこそ、たくさんのおじいちゃんおばあちゃんが丈夫な体で長生きできるようにしていくべきだと考えます。



牛飼になりたい

河合小学校 六年 水川 直太郎

ぼくは将来、牛飼になりたいです。理由は、二つあります。

一つ目は、牛飼いをしているぼくのお父さんの姿にあがれていることです。ぼくの家にいる五十頭の牛をお父さんは、毎日、一生懸命世話をしています。その様子が、とてもかっこいいと思うのです。

二つ目は、牛がとてもかわいいことです。特に、目が好きです。大きくて黒い眼がクリクリとする様子は、とてもかわいいです。大好きな牛の世話をする牛飼いの仕事をしたいと思います。

お父さんは、朝、六時からえさやり、牛のフンを出すたいひ出しをします。昼は、田んぼの仕事をして、夕方に、また、えさやりをします。ぼくも、たいひ出しの仕事を手伝ったことがあるけど、一時間くらいかかりました。大変な仕事だと思いました。

他にも、山から引いている牛の飲み水が少なくなったときは、山へ調べに行くことがあります。牛に異常がないか観察したり、親がいない子牛にミルクをあげたりする仕事もあります。また、牛が病気になったときや、牛がうまく生まれてこないときには、ずっと牛舎にいたりします。

前に、このようなことがありました。子牛が生まれるときに、子牛と一緒に子宮が出てきてしまったのです。早く処置しないと、もう、子牛を産めなくなってしまうです。お父さんは、じゅう医さんに連絡したり、処置の手伝

いをしたりしました。このように、牛の世話は、多くのことに気をつけてしなければなりません。

お父さんの仕事を見たり、手伝ったりしてわかったことだけでなく、国語の学習でインタビューをお父さんにして分かったこともあります。えさやりをするために、牛舎と牛舎の間を何回も往復しないといけないこと、一回一回大きな機械を動かさなければならぬこと、牛のえさになる牧草を収穫するだけでも何日もかかること、そしてその牧草を発こうさせるのに、一〜二か月かかること、牛を移動させるのに手間がかかることなど、ぼくの知らない仕事がたくさんありました。また、牛のえさの収穫は、天候で予定がくずれることがあるということや収穫するための機械がこわれることもあるということも聞きました。食べ物が無かったら、元気な子牛が生まれてきません。牛の健康を維持するには、えさの収穫がうまくいくことが大切だということを聞きました。

お父さんは、こんなことも話してくれました。

「ただの『仕事』として牛の世話をするのではなく、牛がストレスなく成長できるように、過ごしやすい環境をつくっている」

牛は生き物です。何が起こるかわからないので、子牛検査や牛の観察など、とても大切だということがよくわかりました。

今まで、手伝いをしていて、かん単だと思っていたことが、かん単なことではないんだなあと、思いました。牛飼いは、ただ牛が好きなかただけではできません。病気になったとき、何もできなかつたら死んでしまうかもしれません。

ん。牛のことをよく知っていなければダメです。

そういえば、家には、牛についての本が置いてあることに気付きました。お父さんの本だと思います。お父さんが本を読んでいるところを見たことがないので、気付かなかつたけれど、牛についての勉強が必要なのです。牛を飼うための努力を、お父さんはしていて、すごいと思いました。

このように話すと、ほとんどの人は、牛飼いの仕事は大変だから楽しくないのではないかと思うでしょう。でも、ぼくは、牛飼いの仕事を手伝うことは、楽しいです。かわいくて、大好きな牛の世話をするのが、楽しいです。河合小でも牛を飼いたいと思うほどです。

大変なことがあるかもしれませんが、やりたいことをできるのは、本当に楽しいと思っています。やりたいからといってかん単にできるものではないこともわかっています。

だから、ぼくは、中学校を卒業したら、専門の学習ができる学校に進学したり、お父さんから仕事をもっと習ったりして、将来、お父さんのように、ただの『仕事』としてではなく、牛のことを考えた牛飼になりたいです。

令和8年度 飛騨市少年の主張大会 開催要綱

1. 趣 旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などとともに、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

当大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。
2. 主催・共催

飛騨市青少年育成市民会議 ・ 飛騨市 ・ 飛騨市教育委員会
3. 期日・会場

令和8年6月21日（日） 9:30 ～ 12:00 古川町コミュニティセンター
4. 部門・資格

中学生部門：市内中学校の生徒 小学生部門：市内小学校の児童
5. 発表内容

①社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
 ②家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友だちとの関わりなど
 ③テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など
6. 発表要項

「5. 発表内容」①②③の中から1つを選び、5分以内で発表する。
7. 出場者の決定

各学校に作品を募集し、各校長より出場者の推薦を受け決定する。
8. 出 場 者

中学生部門：7名 小学生部門：8名
9. 表 彰

優秀賞 （出場者全員）
10. 出場者の推薦

中学生部門については、選考委員会により審査し、2名を第48回少年の主張岐阜県大会～わたしの主張2026～飛騨地区選考会に推薦する。
11. 選考基準

下表のような論旨、論調、総合の3区分で採点する。

区 分	No.	審査のポイント
論 旨 (内 容)	①	鋭い感性で新鮮な主張であるか
	②	新しい情報や視点があるか
	③	個人の体験にとどまらず、一般性や社会性があるか
	④	提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
	⑤	論旨が一貫し、構成がしっかりしているか
	⑥	事前に提出された原稿と大幅な内容変更がないか
論 調 (話し方)	⑦	主張の内容が共感と感銘を与えているか
	⑧	説得力のある話し方であるか
	⑨	話しぶりに熱意と迫力があるか
総 合 (態 度)	⑩	落ち着いて話していたか
	⑪	聞く人に強い刺激や印象を与えていたか
	⑫	発表時間が5分程度に収まっているか

令和8年度
飛騨市少年の主張大会
～ 発表記録集 ～

作成：飛騨市青少年育成市民会議
